

わたしの十勝

# hometown

## 長瀬 隆

T a k a s h i N a g a s e

# 北海道新聞

## 夕刊

北海道新聞帯広支社  
帯広市西4条南9丁目1-4  
〒080-0855

- 帯広市外局番 0155
- 報道(24) 2151
- 営業(24) 2153
- 販売(24) 2155
- 新得支局 01566(4)5203
- 池田支局 01557(2)2660
- 本別支局 01562(2)2257
- 広尾支局 01558(2)2330

読者センター  
011(210)5888

釧路支社

電話 0154(22)2121

北見支社

電話 0157(24)4566

本社

電話 011(22)2111

ご購入申し込みは

0120-464-104

©北海道新聞社1999

北海道の  
**ち**  
暮らしの  
暮らしの  
暮らしの  
暮らしの

「十勝・帯広は通過点のごときものだったが、近年は大きく変わる事になった」という長瀬隆さん。今夏の帰省の際、帯広市大正町の亡き父・蔵さんが丹精した住宅前庭で

種太から一九四七年に引き揚げて大正村(現帯広市大正町)に住み、九月、帯広中学校に転入学した。はたなく家が上町別に向つて、五〇年三月に卒業するまで、往復で三時間(当時)の汽車通学をした。これは愚痴からは登り坂になつていて、機関車のごよ音がきかれるところであった。今年になつて始まったNHKの朝のドラマで、ボストの位置までおなじ駅の画面を見つづ、私は当時の上町別をおもふことはしばしばである。

五年、早大慶文に進学。うちの自己紹介のときに、帯広高出身であることを話したら、あとで近づいてきて、「小学校までは帯広でした」と名乗った人がいた。それは当然共通の友人がいるはずで、私が小片基君(札幌大名誉教授)の名をなすと、相手にとら

# トク貿易

本社 札幌市中央区本通西4丁目  
札幌秋葉ビル5階 電話 26811  
支店 東京 大塚 仙台  
支店 帯広 旭川 釧路 網走 苫小牧 網走

でも一番親しかった人であった。  
浅川彰三君(東海大)はいまも池田町に縁者がいるという。

新に報じられた。後に七〇年代になって再会した樺太での友人知己には、これらの記事で私の消息を知ったという入々がいた。

六〇年に高社にはいり、二十八年、主としてソ連貿易に従事。八〇年代になつてもよくソ連について結論がでた。それはソ連は崩壊するであろう、またそのほうがロシア人にとつても良いというものであった。かく一八四年に樺

ことである、と私は長く信じてきた。双方に較べると十勝・帯広は通過点のごときものであった。帯広在住の二人の親しい友人が亡くなり、この思ひは強まった。それが近年大きく変わる事となつた。それは、最近のことは六二年に大正に移り、以来久しくその地で開業していた父が、引退のち昨九八年に八七歳でつづが丘に永眠することになったため

## 父が眠る帯広への思い 通過点から大きく変化

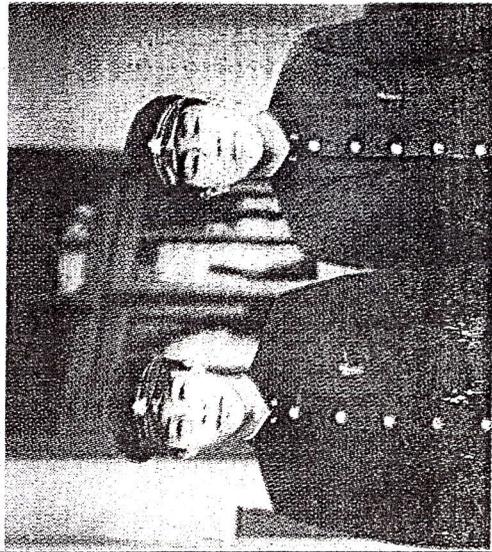
五七年に卒業。原水爆禁止日本協議会に採用され、その代表団にしがたつてモスクワに飛んだ。国交回復後また日があき、モスクワから、広尾に移っていた父(医師)に書いた葉書が道新に掲載された。その二年後の五九年にクイーンでおこなわれた卒和集会に行き、被爆者代表として同行していた現在の家内と帰国後結婚。これが彼女の住んでいた九州と中央の二・三の新聞、および道

太も薄く孤かな(西田書店)という作品を刊行した。

その後家内が腎臓(びりょう)がんのために人工透析の生活にはいり、これが契機となって八九年に『ヒロシマまでの長い道』、またロシア文学関係でドストエフスキに関する研究書の翻訳(みずす書房)を刊行、前後して会社員生活を離れた。

故郷とは樺太であり、現在とは東京で大学生活はいつて以来の

ある。  
思えば、私の第一作および第三作の『微笑の沈黙』(五五年)は、柏葉高出身の後輩の和多田進君がおこなった晩餐社から出てくる。社名の由来は十勝の人には昌明である。また昌更には博学多識な帯広中の大先輩であり、私の支援者である木呂子敏彦さんがおられる。今夏の帰郷にさいして、も氏の腎臓(けいがい)に接し、多大に励まされて帰京したのだった。



帯広での高校時代の長瀬さん(右)

### 作家・ロシア文学者。

1931年、樺太・大泊(コルサコフ)に生まれ、戦後の引き揚げで、47年、大泊中から帯広中学校(新制帯広高校、現在の帯広柏葉高等学校)に転入学した。52年、早稲田大学第一文学部露文科に入学し、57年に卒業した。60年から、貿易高社に勤務し、ソ連貿易に従事し、その後、著作、翻訳活動に転じた。神奈川県川崎市に在住。67歳。